

”中村哲の娘“である、ということ

中村秋子さん

「秋子という名前は父がつけました。女の子だったら生まれ月の季節に『子』をつけたかったし、字画が良かったのだと言っていました。そんなことを気にするのかと意外でしたね」と、はにかみながら話すまなざしは、父親の面影を強く残している。

2019年12月4日、アフガンで凶弾に倒れた中村哲医師[※]の長女、秋子さん40歳。

長年、医療活動やかんがいがい事業などとしてつとめなく大きな人道・復興支援に携わった中村医師だが、家でほんの普通の父親だったと言いつつ、

『樹が好きで、クラシックや童謡を流しながらほぼ一日中庭の草木の

手入れをしていましたし、家族で出かけるときは紅葉の阿蘇や九重へのドライブ、宮崎のえびの高原など、山がほとんどでした。

自分で淹れたコーヒーやお茶をいれるなごころに放置し、また淹れては放置するので家中のマグカップが無くなることもよくありました。穏やかでおしゃべりで、よく冗談を言いつつ、たいがいのことにはおおらかでしたが、挨拶をしなかったり、食べ物の好き嫌いには厳しく、説得に似た叱り方でした。

戻つくと後ろにいるような、大人数の中で端っこに居るようなひとでしたが、父がやってきたことを知るほどに尊敬の念が、喪失感が、存在

感が、日に日に大きくなってきています。』

事件後、医療事務の仕事の傍ら、ペシャワール会の一員として人道・復興支援に携わり始めた秋子さん。『何事も一生懸命やりなさい』『氣立て良くないさい』が口癖だった父の声を決心の励みにして。

「中村哲の娘」である自分ができることは活動を広く知ってもらえるきっかけになること。『父は私が関わることを、照れ隠しで「恥ずかしいよ」と言いつつも喜んでくれていてと思います』と輝くまなざしをしっかりと前に向けた。



◀ペシャワール会
詳しくはこちらから

※中村哲医師へ10月6日古賀市名誉市民称号を贈呈